

同行記者取材記

平成二十九年
意見交換会を振り返る

日刊建設通信新聞社記者

岡部敦己 *Asumi Okabe*

五月十一日の関東地区から六月十二日の九州地区まで、約一カ月にわたって全国九地区で開かれた日本建設業連合会（日建連）と国土交通省各地方整備局等による、平成二十九年年度の「公共工事の諸課題に関する意見交換会」が全日程を終えた。政府が時間外労働の上限規制を建設業にも適用する方針を固める等、業界を取り巻く環境が大きく変わりつつある中、各会場では「働き方改革」の実現に向け、受発注者が本音を交えて意見を交わした。「受発注者の目指す方向はほぼ一致していることを確認できた」。大西亘関東地方整備局長の言葉を借りれば、双方は課題に対して共通の基本認識を持っている。生産年齢人口の減少や建設技能者の高

齢化を背景とした担い手確保、週休二日実現の原資となる生産性向上等、直面する課題解決に向け、受発注者間の相互理解が大きく前進した意見交換会を振り返る。

官民一体で週休二日実現

日建連は今回の意見交換会の提案テーマとして、▽社会資本整備の進め方▽担い手確保への取組み▽生産性の向上▽公共建築工事に係る課題——の四つを設定。自由討議では、適切な工期の確保、休日の拡大、業務の効率化推進、コンクリート工の生産性向上について集中的に意見を交わした。

日建連が働き方改革の「二丁目一番地」に位

置付ける週休二日について、宮本洋一副会長・土木本部長は各地区で、「担い手確保に向けて避けては通れない課題であり、推進本部を設置して強い決意で活動を開始した。発注者と課題を共有しながら取組みを進めていきたい」と土日の休みをベースとした休日拡大の必要性を強調し続けた。

週休二日に対しては、各整備局も積極的なモデル工場の試行等によって全面的にバックアップする方針を示した。大西局長は、「週休二日は建設業に若者を引き寄せるための必須アイテムだと認識している」とした上で、「結果を出す」ための取組みを加速する考えを表明した。また、池田豊人近畿地方整備局長は、「数年後には建

設業に入れば二日休めるという状況になるよう努力したい」と全面サポートする姿勢を見せた。

休日拡大の促進に向け、日建連が必要性を主張した加点によるインセンティブに対しては、各地方整備局等から達成した場合は工事成績評定で加点措置を講じるといった方針が示された。「まずは慣れてもらう」。企業がチャレンジしやすい環境を整えるというスタンスは各地方整備局ともほぼ共通しており、官民一体となった取り組みの推進に意欲を見せた。

共有から「共同管理」へ

各会場では整備局等から、休日拡大の前提となる適切な工期設定や、書類の簡素化に前向きに対応する意見も多く出された。適切な工期の確保については日建連が、迅速な現場対応を可能にし、円滑な施工と工程遅延の予防等に効果を発揮する「工事工程の共同管理」を提案。全会場自由討議の進行役を務めた小原好一理事・土木本部副本部長は「プロジェクトマネジメントのレベルまで高度化を目指すべきと考えている」とし、共有から共同管理への進化を呼びかけた。

共有からのグレードアップについては、前向きな姿勢を示す整備局もあった。北陸地方整備局は、二十九年度から工事円滑化推進会議の施工条件確認、工程調整両部会の開催を原則化し、受発注者間の工程共有体制をより一層強化する

方針を表明。東北地方整備局は、復興道路等で活用している事業促進PPPやCMを参考にしながら「工程管理、マネジメントも検討していきたい」と意欲を見せた。工事工程の共有については、メリットを感じている受注者も多く、適正工期をめぐる受発注者双方の歩み寄りは今後さらに加速しそうだ。

生産性向上では、日建連側が会員の具体的な好事例を交えながらプレキャスト（PCa）の導入促進を要請した。「ICT活用等だけで二〇%の生産性向上は厳しい」とした上で、品質や安全面での優位性を強調し、ライフサイクルコストや早期供用といった効果も考慮した上での導入促進を訴えた。発注者側は早期供用のメリット等に一定の理解を示し、「周辺への影響や現場条件といった本体外工事以外の要素も考えながら、積極的な採用をしていきたい」という前向きな回答もあった。

終わりに

最終日となる六月十二日の九州地区で会見した宮本土木本部長は、「例年以上にパートナーシップが実感できた。各局長からの『忌憚のない意見交換会だった』という言葉が最大の成果だと思う」と振り返った。整備局側からは「筋書きのない意見交換ができた」といった声も聞かれ、受発注者双方が信頼関係の下、共通の目標達成に向けて、本音をぶつけ合うスタイル

は定着しつつある。

今年は支部主催による八地区の懇親会すべてにけんせつ小町が出席したのも大きな特徴として挙げられる。小町の参加人数は計約二四〇人。最多の七二人が出席した東北地区で乾杯前にあいた宮本土木本部長は「のちほどご挨拶に伺いますので七二枚の名刺のご用意を」と会場を沸かせ、「小町が働き続けられる環境をつくっていくことは、若い人に魅力のある職場に変わることに」と、さらなる女性の活躍推進と他産業に負けない業界への飛躍に強い決意をにじませた。

会見では、「来年は意見交換会で小町の発言機会を設けることも含めて検討したい」と本部長私案を披露し、女性の活躍推進に向けた新たな仕掛けづくりに意欲を見せた。個人的には私案の実現を楽しみにしている。

今回、初めて全地区の取材をさせていただいたが、全国津々浦々への移動は想像以上に気力体力を消耗させることを実感した。過密スケジュールの合間を縫って、「全国ツアー」にフル参加した日建連幹部の超人ぶりには頭が下がった。懇親会等で疲れを見せずに記者の質問に快く対応していただいた幹部と、約一カ月にわたって円滑な取材にご協力いただいた本部事務局、会場設営や懇親会の準備に汗を流された支部の方々に、改めてお礼を申し上げたい。